

ドイツ語話法詞と心態詞の多機能性について

— *Vielleicht* haben Sie *ja* Recht. の例に関して —

井 口 靖

【要旨】 *Vielleicht* haben Sie *ja* Recht. のような例においては、可能性の低さを表わすとされる *vielleicht* と事実性、既知性を表わすとされる *ja* が同時に用いられているが、これらは本来矛盾する機能である。ここでは *ja* と *vielleicht* の多機能性から、*ja* は命題が聞き手によって想定され得る内容であることを表わし、*vielleicht* は発話すること自体に対する話し手の控えめな態度を表わすものと分析する。

0. はじめに

映画 *Pünktchen und Anton* (邦題『点子ちゃんとアントン』) に次のようなセリフが出てくる。

(1 a) *Vielleicht* könnten Sie das mit dem Brief *ja* doch noch mal sein lassen.

(1 b) Na, *vielleicht* haben Sie *ja* Recht.

(1 c) *Vielleicht* kann ich *ja* doch irgendwie helfen.

いずれの文も、本来優等生の *Anton* が授業中に居眠りをするなど様子がおかしいことから、担任の *Bremser* 先生が母親に手紙を書くことになったため、*Pünktchen* が密かに *Bremser* 先生と会って、*Anton* の家庭の事情を説明する場面に用いられている。(1 a) は *Pünktchen* が、*Anton* の母親が病気でそのために *Anton* が夜働いていてそれで授業中に居眠りをするのだと説明して、手紙を出すのをやめてもらえないだろうかとお願いするせりふである。(1 b) は *Bremser* 先生の、事情はわかったが、親子を今のまま放っておくわけにはいかない、ということばに対する *Pünktchen* の対応である。(1 c) はこの場面の最後に、*Bremser* 先生が *Pünktchen* の言い分を受け入れ、それでも母親が治ったら相談に乗ろうと言っているものである。

ここで注目したいのは、同じ文の中で *vielleicht* と *ja* が同時に用いられているところである。*vielleicht* は岩崎 (1998:1232) によると、「『陳述内容の現実性についての話し手の確信の無さを示して』もしかすると、ひょっとして、場合によっては」とされている。一方、同書 (693) で *ja* は「陳述内容が、聞き手と共通の既知の事実である、あるいは自明の事実であるという、話し手の判断を示して。」となっている。単純に見ると、話し手は、既知の事実または自明の事実であると判断しながら、確信のなさを表現していることになり、これらが同じ文で用いられるというのは意味的に矛盾しているように思われる。これはどう説明されるべきであろうか。

vielleicht も *ja* も従来は副詞とされていたが、現在では上記のような用法においては、

vielleicht は Modalwort（話法詞）、ja は Modalpartikel あるいは Abtönungspartikel（心態詞）と分類されることが多い。ここでは vielleicht と ja の共起を手掛かりに、話法詞と心態詞とされる語の多機能性について検討したい。

1. コーパスによる調査

実は vielleicht, ja がこのように同時に用いられる例はこの映画ではこの場面に限られる。そこで、特別な例とも考えられるので、コーパスを用いてこのような例が他にもありえるのかどうかをまず確認しておくことにする。

DWDS コーパス¹⁾を検索すると vielleicht は 43578 件のヒットがあるが、この Kollokation を調べると ja は 803 件で、sogar, schon, einmal, gar, vielleicht, mehr, sagen に次いで第 8 位である。もちろんこの中には意図した (1) の ja の用法とは、関連するだろうが、ずれを感じる次のような用法も含まれる。

(2 a) ein Zustand, der, so die Expertenmeinung, sich sogar bei diesem fünfundneunzigjährigen Greis längere Zeit, *ja vielleicht* Monate lang, wo nicht über ein Jahr, bis zum endgültigen Exitus hinziehen konnte. (Degenhardt, Franz Josef, Für ewig und drei Tage, Berlin: Aufbau-Verl. 1999, S. 325)

(2 b) Trotz einer gewissen Übersättigung des Marktes hat die Psychoanalyse den Bankrott des älteren sozialistischen Partners überlebt, *ja, vielleicht* sogar davon profitiert, indem sie einige neue Kunden eingefangen hat. (Schwanitz, Dietrich, Bildung, Frankfurt a.M.: Eichborn 1999, S. 350)

また Kollokation と言っても、DWDS の場合には、前後 5 語の範囲に生起するかどうかを判定するので、場合によっては別の文に使われたものも含まれてはいる。しかしながら、次のような例がさまざまな作家において多数見つかる²⁾ ところから判断して、vielleicht と ja の組み合わせは決して特殊なものではないと言えるだろう。

(3 a) Ich überlege, ob ich noch mal bei Igor anrufe, seine Stimme höre und dann ganz schnell wieder auflage. *Vielleicht* muntert mich das *ja* etwas auf. (Dückers, Tanja, Spielzone, Berlin: Aufbau-Verl. 1999, S. 25)

(3 b) Um der Sache zusätzliches Gewicht zu verleihen, selber aber möglichst unerkannt zu bleiben, entschlossen wir uns, mit Die fortschrittliche kommunistische Jugend der DDR zu unterzeichnen. Das war zugegebenermaßen etwas anmaßend, aber daß viele wie wir fühlten und dachten, schien uns sicher, und *vielleicht* führte unsere Aktion *ja* doch zu mehr. (Engler, Wolfgang, Die Ostdeutschen, Berlin: Aufbau-Verl. 1999, S. 313)

(3 c) Diese Konstruktion, das ist ja was ganz Tolles. *Vielleicht* kommen *ja* noch ein paar Beamte von anderen Behörden. (Hannover, Heinrich, Die Republik vor Gericht 1975 - 1995, Berlin: Aufbau-Verl. 1999, S. 165)

(3 d) Man wolle mal sehen, sagte er, *vielleicht* stecke *ja* tatsächlich mehr dahinter. Er nahm den Wisch mit. (Degenhardt, Franz Josef, Für ewig und drei Tage, Berlin: Aufbau-Verl. 1999, S.

218)

(3 e) Natürlich werden Sie fragen, wo das transzendente Subjekt ist. Ich gebe zu, *vielleicht* ist es *ja* kein Subjekt, aber transzendent ist es allemal. (Schwanitz, Dietrich, Bildung, Frankfurt a.M.: Eichborn 1999, S. 398)

2. ja の機能

Weydt (1969) が *ja* を含む Abtönungspartikel に光を当てて以来、その機能についてはさまざまな研究がなされてきた。*ja* に関する先駆的な包括的研究である Bublitz/Roncador (1975) は Das *ja* der Bekanntheit, Das *ja* im Ausrufesatz, Das Starkton-*ja* im Imperativsatz, Vergewisserungsfragen, Das affirmative *ja* nach Satzfragen をとりあげている。ここで問題にしている *ja* は Bekanntheit とされているものである。

Hartmann (1977:108) は平叙文に現われる心態詞を発話行為の観点から分析しているが、*ja* を含む文の共通性を次のように述べている。

Grundsätzlich gesehen könnte man auch hier von Information sprechen, die S bei H als bekannt ansetzt bzw. von einem Sachverhalt sprechen, den S als unbestreitbar gegeben ansieht. Zumindest wird diese Bekanntheit nicht ausgeschlossen; der Sprecher nimmt nicht an, daß die mitgeteilte Information für den Hörer neu ist.

Burkhardt (1982:354) は、*ja* には 19 の異なった伝達的な機能があるとしているが、いわゆる心態詞としての *ja* については次のように述べている。

In Aussagesätzen, d.h. in Behauptungshandlungen, tönt *ja* das Gesagte dadurch ab, daß es dem Sprecher, dem Hörer oder beiden ein Wissen um den in der Proposition ausgedrückten Sachverhalt bescheinigt bzw. unterstellt und damit den Zusammenhang zu früheren Situationen und Texten oder früheren Sprechhandlungen oder Ereignisse innerhalb desselben Textes oder derselben Kommunikationssituation herstellt.

Weydt/Harden/Hentschel/Rösler (1983:66) はいわば心態詞の教科書 *Kleine deutsche Partikellehre* の中で、アクセントのない *ja* を次のように説明している。

Man versucht mit *ja*, eine Übereinstimmung herzustellen. Deshalb wirken Sätze mit *ja* oft freundlicher als solche ohne *ja*.

また、Helbig (1988:165 ff.) は *Lexikon deutscher Partikeln* で 9 タイプの *ja* をあげて、平叙文中の Abtönungspartikel としては次のように記述している。

Signalisiert den geäußerten Sachverhalt als dem Sprecher und dem Hörer bekannt (= *wie wir beide wissen*) oder gar als evident bzw. allgemeingültig, bezieht sich auf gemeinsames Vorwissen, setzt

Konsens (eine gemeinsame Kommunikationsbasis) voraus und/oder appelliert an Übereinstimmung. Sprecher setzt den Sachverhalt als bekannt voraus, möchte sich jedoch vergewissern, ob er gegenwärtig ist (ruft ihn gleichsam ins Gedächtnis zurück).

Maibauer (1993:131 ff.) は次のような Thurmair (1989) と Lindner (1991) の記述をとりあげ、このうち Lindner に準拠してアクセントのある ja とアクセントのない ja を統一的に説明しようとしている。

Thurmair (1989:104) : Mit *ja* zeigt der Sprecher an, daß die Proposition nach seiner Meinung auch dem Hörer bekannt ist.

Lindner (1991:178) : (It is necessary that) If the speaker uses MP *ja* in an illocution type IT³⁾ referring to a proposition p, then s/he assumes at the time of speaking t that it is not the case that there is a proposition q in the set of propositions activated at t such that p is not true.

それぞれニュアンスの相違はあるが、いずれも ja に Bekanntheit, Übereinstimmung のような機能を認めていると言えるだろう。Rinas (2007:205 f.) はそれらでは説明できないような、たとえば、次のような例（もとは Brausse (1986:213) のもの）を詳細に検討している。

(4) A: Würden Sie bitte weiter durchgehen!

B: Nein, ich muß *ja* nächste Station schon aussteigen!

ここでは見知らぬ相手と考えられる A は B が次の駅で降りることを知る由もない。これを Rinas (2007:208) は Sie müssen wissen, dass ... のように説明し、陳述文での ja の「使用規則」を次のように提案している。確かにこれは広く説明を可能とするものかもしれないが、聞き手が反論しないのは ja にそのための何らかの機能があるからであって、反論を妨げようとするのは ja の機能そのものではなく、結果であるとみなすべきであろう。

Wenn ein Sprecher einen Aussagesatz S mit der Partikel *ja* äußert, dann präsupponiert er damit, dass der Hörer S nicht widersprechen wird. (Rinas (2007 : 207))

Hoffmann (2008:211) も ja を包括的に扱っており、そのうち、平叙文に現われる ja については次のような言い方で説明しているが、これは結果として聞き手に影響を及ぼすと見ているためであろう。

Das *ja* in assertiven Äußerungen respondiert auf eine virtuelle Fraglichkeit mit der Folie einer Entscheidungsfrage, deren Proposition im Satzrest formuliert erscheint und mit dem *ja* als aus Sprechersicht gewiss geltend hingestellt wird. ... Das *ja* realisiert auch im assertiven Gebrauch eine operative Prozedur und kennzeichnet den Wissensstatus einer Proposition in der unmittelbaren Umgebung als hörerseitig zu übernehmende Gewissheit.

日本では、岩崎（1998）が冒頭にあげたような記述をしているが、井口（2000:130）は「話し手が想定していた命題が現実世界では疑うべからざる事柄であることを表現する。ここではその命題と並行する他の命題は考慮されておらず、ひたすらその命題が事実であることを主張するものと考えられる。doch と異なり ja は先行する発話への反応という側面は弱く、事実性の主張が全面に出る。」としている。井口（2000）は聞き手との関係よりも話し手内部の問題ととらえているので、たとえば（4）のような例にも適合する。ただし、岩崎（1998）と同様に（1）（3）のような例は説明できない。

3. *vielleicht* の機能

Helbig（1981）, Helbig/Buscha（2005）などで、*wahrscheinlich*, *vielleicht*, *leider*などは、上位文や挿入文に書き換えられる、一語で決定疑問文の答えとなる、疑問詞で問えない、否定の対象とはならない、代用表現にならないなどの性質のため、様態の副詞とは区別され、Modalwort（話法詞）という別の品詞とされた。

Helbig/Buscha（2005:435）では *vielleicht* を Hypothesenindikator とし、*eine Einstellung des Glaubens, die sich beziehen kann ... auf große Unsicherheit* を表現するとしている。Helbig/Helbig（1993:270）は Lexikon deutscher Modalwörter で次のように意味記述している。

Sprecher signalisiert unsichere Vermutung hinsichtlich der Realität/Realisierbarkeit von p. Zweifel sind nicht ausgeschlossen, aber die Faktizität von p wird immerhin für möglich gehalten (Es ist vielleicht so, daß p./Für Sprecher gilt: ebensogut p wie nicht p.)

Gerstenkorn（1976:340）は *vielleicht* の表わす可能性を 50% とし、Wiegand（1982:111）は次のような文をあげて、話し手の不確実性を示している。

(5) *Vielleicht* schläft Ute, *vielleicht* (aber) (auch) nicht.

先にあげた DWDS の *vielleicht* の Kollokation で *vielleicht* が上位にあがっているのもこれと同様の例であると思われる。

井口（2000:97）では、*vielleicht* は「事実判断の話法詞」のうち「可能性」を表わすもので、「想定された命題をひとつの可能性として表現する。話し手は別の可能性を排除しない。」としている。

話法詞 *vielleicht* の意味については、どの研究者の見解にも大きな違いはないと見てよい。

4. *ja* と *vielleicht* の共起

以上見てきたように、*ja* に聞き手の既知性を加えるかどうかは別にしても、*ja* によって話し手が命題の事実性（または既知性）を主張し、*vielleicht* はその逆に命題の事実性を単なる可能性としてしか示さないということが研究者たちの一致した見解であると言ってよいだろう。もしこれらが正しいならば、（1）（3）のような場合、この二つの語が同じレベルで作用してい

ると矛盾を生じることになる。これはどう説明されるべきなのだろうか。

ここで、(1) にあげた例文の ja の機能について再度検討してみると、(1 c) については、命題内容⁴⁾ は世間一般の常識として言えることであり、いわば ja の基本的性質から説明できる。ところが、(1 a) の「手紙を出さないでおく」という命題は必ずしも Bremser 先生にとって事実ではないし、また、既知のことがらでもない。ただ、Pünktchen のそれまでの話から当然予想がつくことがらではある。それは、(1 b) についても言えることで、Bremser 先生が主張していることが正しいという明確な事実はないが、本人が主張していることは当然正しいとされていると考えてよいだろう。(3) の各例文についても、登場人物あるいは読者にとって必ずしも事実あるいは既知とは言えないが、少なくとも頭の中で想定される命題であることは確かである。

ここでは、ja の機能を「聞き手によって命題内容が想定されうることを表わす」と仮定しておこう。

ここで少し目を転じて、vielleicht について、語法詞以外の用法についても見てみよう。Helbig/Helbig (1993:271) は語法詞 vielleicht の Homonym として次のようなものをあげている。vielleicht には心態詞や Gradpartikel としての用法も認められる。

- (6 a) Das hat *vielleicht* gegossen! (Abtönungspartikel)
- (6 b) Ist das *vielleicht* schön? (Abtönungspartikel)
- (6 c) *Vielleicht* grüßt du einmal anständig! (Abtönungspartikel)
- (6 d) Du hast *vielleicht* Glück gehabt! (Abtönungspartikel)
- (6 e) Er hat *vielleicht* 20 DM verspielt. (Gradpartikel)

心態詞の vielleicht については Hentschel (1981:15 ff.) がおもしろい指摘をしている。インフォーマントにいろいろな種類の髭の生えた男の絵を見せて、次のどの文を言うかという調査をしたところ、aber は髭の量が多い場合に使い、vielleicht は髭の形が特別な場合に使うという人が多いというのである。

- (7 a) Der hat *aber* einen Bart!
- (7 b) Der hat *vielleicht* einen Bart!

そして、Weydt/Harden/Hentschel/Rösler (1983:171) では vielleicht の Übergreifende Bedeutung として次のように述べている。

Die übergreifende Bedeutung scheint darin zu liegen, daß man darüber staunt, daß etwas überhaupt in dieser Weise möglich ist (z.B.: so langweilig) . Diese Verwendung von *vielleicht* ist jedoch hochgradig konventionalisiert.

言いかえると「そんなことがありえるのだろうか」という可能性の低さを vielleicht の基本的な意味としているわけだが、もちろんこれは (6) の心態詞の例にはあてはまっても⁵⁾ その

まま話法詞の *vielleicht* にはあてはまらない。ただし、驚きの根拠としての可能性の低さに関して話法詞との意味的関連を見い出せる。これは、(6 a) の数詞の前に置かれる Gradpartikel の *vielleicht* にもつながる。ここでは話し手は 20 DM という数値に驚いているわけではないが、その数値自体に自信が持てずに述べていると考えられる。可能性の低さを述べることでより、その妥当性を保留しているのである。

これらのことから、話法詞、心態詞、Gradpartikel としての *vielleicht* の機能の根本には「ありえなさ」のようなものが見てとれるわけであるが、最初の問題に立ち返る前に、さらなる *vielleicht* の用法に触れておく必要がある。

話法詞は一般に疑問文に用いられないが、*vielleicht* は決定疑問文に用いることができる。

(8 a) War er *vielleicht* gestorben? (Ende, M.: Die unendliche Geschichte)

(8 b) Hast du zu Hause *vielleicht* keine Angst davor? (Ende, M.: Momo)

(8 c) Sollen ihn die Kameraden morgen nacht *vielleicht* in die Berge raufschleppen und dort verstecken, ...? (Simmel, J.M.: Bitte, laßt die Blumen leben)

疑問文により真偽を問いながら、*vielleicht* によってそれに対する話し手の事実判断を述べるとするのは矛盾する。これについては、井口 (1987:221) では次のような例をあげて、「Sie wollen mir helfen という命題に対して、話し手は ich denke という立場を表明し、同時に命題の真偽を相手に尋ねていると考え」、(8) のような場合も「話し手は命題に対して *vielleicht* という判断を下し、同時に同じ命題の真偽を相手に尋ねている」としている。

(9) Ich denke, Sie wollen mir helfen?

このような場合、wahrscheinlich などが使えず、*vielleicht* が可能なのは、*vielleicht* の表わす可能性の低さが決定疑問文の命題に対する話し手の立場と矛盾しないためであろうが、真偽を問う決定疑問文にわざわざ *vielleicht* が用いられている理由は明らかではない。

Helbig (1988:230) や Bublitz (1978:56) は次のような疑問文中の *vielleicht* は否定的な答えを予想しているとしている。

(10 a) Ist das *vielleicht* eine Lösung? (Nein, es ist keine Lösung.)

(10 b) Arbeitet er *vielleicht*? (Nein, er arbeitet nicht.) (Helbig (1988 : 230))

また、Helbig (1988:230) や Luchtenberg (1987:17) によると、次のように依頼、要求として用いられることも多いとする。

(11 a) Könnten Sie das *vielleicht* für mich erledigen?

(11 b) Haben Sie *vielleicht* Feuer?

ここでは *vielleicht* が使われた文は否定的な答えを予想するからこそ、その分控えめな方向に働き、依頼、要求に使いやすいということになるのだろう。

そうすると、(8) のような場合においても、話し手は「そういうことはないと思うが」という否定的な立場を表明することにより、自分の発話内容に慎重であることを表明し、それによって場合によっては、聞き手に対する配慮を示していると考えることができる。この決定疑問文の *vielleicht* の機能は、語法詞よりはむしろ (6) のような心態詞や *Gradpartikel* からの方が考えやすいかもしれない。つまり、単に命題の事実性に対する話し手の判断を表わすというよりは、「そういうことはないと思うが」と述べることにより、現実の場面では自分の発話行為自体と聞き手との関係に作用していると考えることができるのである。

ここで (1) に立ち戻ることしよう。以上のような考察を踏まえると、(1) では *ja* によって、(少なくとも) 聞き手が想定しうる命題であることを表現しているが、それと同時に、*vielleicht* によって話し手の発話行為自体に対する控えめな態度を表現しているのとらえることができるのではないだろうか。つまり、*vielleicht* は命題内容の事実性というよりは、それを表現すること自体に躊躇しているのである。(1 a) (1 b) では、*Pünktchen* は Bremser 先生が当然想定していることではあると思っているが、先生に向って直接、*Sie könnten das mit dem Brief doch noch mal sein lassen.* とか *Sie haben Recht.* と述べることはやはり躊躇されることであった。そこで、*vielleicht* を付け加えることによって控えめな態度を表明したのであろう⁹⁾。これは (11) の例と近いが、(1) では *ja* によって、それには想定されうる命題が埋め込まれていると表現されているところが異なる。つまり、相手が想定しているであろうという配慮をしながらも、さらにそれを控えめに表現していることになる。かなり慎重な態度と言えるだろう。そのように仮定すると、*ja* と *vielleicht* は異なる機能を持つことになり、同じ発話で使われても矛盾は生じないことになる。

これは Bremser 先生のせりふである (1 c) にはそのまま当てはまらないようにも思える。先生が *Pünktchen* に控えめな態度をとるとは考えにくいからである。ただこの場合には、Bremser 先生も一般論としては当然想定されることとはしながらも、自分では実際の Anton の状況を把握していないために、やや控えめな態度をとらざるをえなかったと考えることができるだろう。担任として事情を知らず、*Pünktchen* に指摘されたために、*Pünktchen* に配慮したとも考えられる。

なお、(1) については、*vielleicht* の位置にも注目したい。ここではいずれも文頭に用いられている。文頭に用いられる要素によって、聞き手はその後の展開を予想する。一般に *vielleicht* に続くものは話し手が確信を持って述べられないことである。聞き手は事実とはとらえないという心構えをする。しかし、そこに *ja* が挟まれることによって、結果的に *vielleicht* は内容に対するものではなく、控えめな態度なのだ聞き手は自然に理解すると考えられる。(3) についても *vielleicht* が文頭に用いられているのは偶然ではないだろう。

以下では *ja*, *vielleicht* の機能の多様性とそれらの関係を位置づけ、この小論のまとめとしたい。

5. 言語の機能と *ja*, *vielleicht*

ローマン・ヤーコブソンは「言語と詩学」(1973:187) において、言語伝達行動に含まれる要因として、発信者、受信者、メッセージ、コンテクスト、接触、コードをあげ、それぞれに

対応する言語機能として、心情的機能、動能的機能、詩的機能、関說的機能、交話的機能、メタ言語的機能を想定している。

コンテキスト
メッセージ

発信者 ----- 受信者

接触
コード

これに即して、今 *ja* と *vielleicht* の機能を位置づけてみたい。

ja は第一義的にその命題と現実との関係を表わすものだとすると、「関説されるコンテキスト」(ヤーコブソン 1973:187) に働くもの(関說的機能)と言えよう。そして、実際の場面において、*ja* が聞き手の既知性に言及し、あるいは Rinas (2007:208) が言うように、聞き手の反応をも制御する働きを持っているとしたら、それは、受信者に関係する機能(動能的機能)を持ってくるということになる。それは日本語ではたとえば終助詞に認められる機能に近くなる。

(12) 明日ドイツ語のテストだよね。

それでは *vielleicht* の機能はどう位置づけられるのだろうか。*ja* と同様に *vielleicht* も第一義的にはその命題と現実との関係に関するものだと考えられるので、関說的機能が問題となっている。ただ、関說的機能というのは、当然、メッセージのあり方とその内容(コンテキスト)の関係が問題になるわけであり、そして、ここではもっぱら内容が問題にされているということである。

しかし、次のような Gradpartikel の場合にはその内容よりもメッセージのあり方に重点が置かれていると言えよう。

(6 e) Er hat *vielleicht* 20 DM verspielt.

つまり、ここでも 20 DM というメッセージ(の一部)とコンテキストの関係が問題になっているのだが、この場合、20 DM というメッセージそのものに話し手の注意が向けられている(「果たして"20 DM"と言ってよいものか」)。メッセージ自体に注目するということはヤーコブソンの「詩的機能」へと向いていることになる。

これが感嘆文に用いられると(7 b)のように意外性、驚き(「果たして"Bart"と言ってよいものか」)を表わすことになると思われる。これが話し手の驚きを表わしているならば、発信者に関する心情的機能に位置づけられる。

(7 b) Der hat *vielleicht* einen Bart!

そして、(6 e) の用法は一方では次のような疑問文の用法につながる。

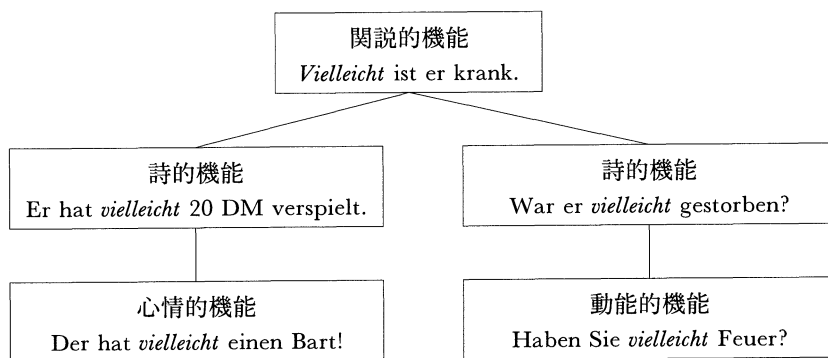
(8 a) War er *vielleicht* gestorben? (Ende, M.:Die unendliche Geschichte)

ここでは、このようなメッセージ（特に焦点となっている gestorben という語）を口に出すこと自体が憚られていると思われる。それが依頼、要求を表わす文に用いられると相手に対する配慮の表現となる。これは ja とは異なる意味での動能的機能と言えるだろう。

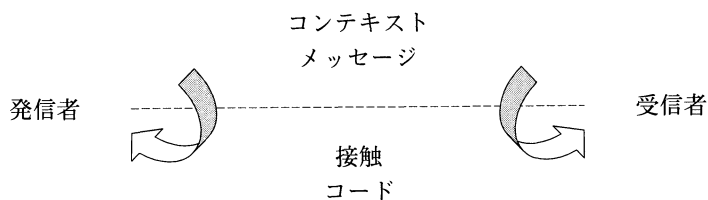
(11 b) Haben Sie *vielleicht* Feuer?

これらをまとめると次のように図示できる。

(13) *vielleicht* の機能



これは言語伝達の要素から見ると、コンテキストからメッセージを経て、発信者、受信者へ向かう流れと見ることができる。



このように、第一義的には矛盾するような機能を持つ ja と vielleicht も、実際の場面ではさまざまな機能を持ちうるので、(1) や (3) のような例があるのだと考えられる。そして、このような多機能性はさまざまな話法詞、心態詞についても見られるものなのであろう。この小論がその一部を提示できたことになれば幸いである。

註

*本研究は科学研究費補助金（課題番号：21520436）の助成を受けたものである。

- 1) <http://www.dwds.de/> DWDS の概要と利用法については、今道・恒川 (2009) 参照。
- 2) DWDS コーパスは、1900 年から 2000 年までの資料を擁するが、ここではなるべく近年の例を拾い出した。
- 3) IT は Assertion と Exclamation という発話行為を指す。
- 4) 発話は「モダリティ」と「命題 (内容)」からなると考える。モダリティとは話し手の心的態度で、命題は現実世界に対応するものである。(井口 (2000:4 ff)、井口 (2008:141 f.) を参照。) 問題の文では *ja*, *vielleicht* がモダリティ表現と考えられるので、それ以外が命題となる。
- 5) ただし、(6 c) については「驚き」はあてはまらないので、このような例は考慮されていないのだろう。(6 c) についても、同様だとすると、要求内容について可能性が低いことを表現することにより話し手のいらだちなどが表わされると考えられる。
- 6) (1 a) では *könnte* が用いられているが、接続法第 2 式を用いることによって、控えめな態度を表現することと同じ方向性を持つと言えるだろう。接続法第 2 式の場合には、非現実→可能性の低さ→控えめな態度という流れになると思われる。

参考文献

- Brause, U. (1986) Zum Problem der sogenannten Polyfunktionalität von Modalpartikeln. *Ja* und *eben* als Argumentationssignale. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 39, S.206-223
- Bublitz, W. (1978) Ausdrucksweisen der Sprechereinstellung im Deutschen und Englischen (=Linguistische Arbeiten 57). Niemeyer/Tübingen.
- Bublitz, W./Roncador, M.v. (1975) Über die deutsche Partikel *ja*. In: Bátori, I. et al. (Hgg.) Syntaktische und semantische Studien zur Koordination (=Studien zur deutschen Grammatik 2). Narr/Tübingen, S.139-190
- Burkhardt, A. (1982) Die kommunikativen Funktionen von >>*ja*<< und ihre lexikographische Beschreibung in Wörterbüchern. In: Muttersprache. Zeitschrift zur Pflege und Erforschung der deutschen Sprache 92, S.337-361
- Gerstenkorn, A. (1976) Das „Modal“-System im heutigen Deutsch (=Münchener Germanistische Beiträge 16). Wilhelm Fink/München.
- Hartmann, D. (1977) Aussagesätze, Behauptungshandlungen und die kommunikativen Funktionen der Satzpartikeln *ja*, *nämlich* und *einfach*. In: Weydt, H. (Hg.) Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung. Niemeyer/Tübingen, S.101-114
- Helbig, G. (1981) Die deutschen Modalwörter im Lichte der modernen Forschung. In: Beiträge zur Erforschung der deutschen Sprache Bd.1, S.5-29
- Helbig, G. (1988) Lexikon deutscher Partikeln. VEB Verlag Enzyklopädie/Leipzig.
- Helbig, G./Buscha, J. (2005) Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Langenscheidt/Berlin, München, Wien, Zürich, New York.
- Helbig, G./Helbig, A. (1993) Lexikon deutscher Modalwörter. 2., durchgesehene Auflage. Langenscheidt-Verlag Enzyklopädie/Leipzig, Berlin, München.
- Hentschel, E. (1981) Partikeln und Hörereinstellung. In: Weydt, H. (Hg.) Partikeln und Deutschunterricht. Julius Groos Verlag/Heidelberg, S.13-30
- Heringer, H.J. (1988) Ja, ja die Partikeln! Können wir Partikelbedeutungen prototypisch erfassen? In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 41, S.730-754
- Hoffmann, L. (2008) Über *ja*. In: Deutsche Sprache 36, S.193-219
- Lindner, K. (1991) 'Wir sind ja doch alte Bekannte' The use of German *ja* and *doch* as modal particles. In: Abraham, W. (Hg.) Discourse Particles. Descriptive and theoretical investigations on the logical, syntactic and pragmatic properties of discourse particles in German (=Pragmatics & Beyond, New Series

- 12) . John Benjamins Publishing Company/Amsterdam, Philadelphia, S.163-201
- Luchtenberg, S. (1987) „Mein Vater war vielleicht wütend“. Zur Partikel ‚vielleicht‘ und ihrer Vermutung an ausländische Deutschlehrer (innen) . In: Deutsche Sprache 1/1987, S.1-24
- Meibauer, J. (1993) Auf dem JA-Markt. In: Rosengren, I. (Hg.) Satz und Illokution. Band 2 (=Linguistische Arbeiten 279) , S.127-149
- Rinas, K. (2007) Bekanntheit? Begründung? Einigkeit? Zur semantischen Analyse der Abtönungspartikel ja. In: Deutsch als Fremdsprache 44. Jahrgang 2007, Heft 4, S.205-211
- Thurmair, M. (1989) Modalpartikeln und ihre Kombinationen (=Linguistische Arbeiten 223) . Niemeyer / Tübingen.
- Weydt, H. (1969) Abtönungspartikel. Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen. Bad Homburg v.d.H.
- Weydt, H./Harden, Th./Hentschel, E./Rösler, D. (1983) Kleine deutsche Partikellehre. Ernst Klett Verlag/Stuttgart.
- Wiegand, H.E. (1982) Zur Bedeutungserläuterung von Satzadverbien in einsprachigen Wörterbüchern. In: Mentrup, W. (Hg.) Konzepte zur Lexikographie (=RGL 38). Niemeyer/Tübingen, S.103-132
- 井口 靖 (1987) 「モダリテートの構造－Modalwort のモダリテートと文モダリテート－」 (『Spuren』三修社, S.217-227)
- 井口 靖 (2000) 『副詞』(浜崎長寿・乙政潤・野入逸彦編「ドイツ語文法シリーズ」第5巻) 大学書林
- 井口 靖 (2008) 「話し手の心的態度を表す副詞」(三瓶裕文／成田節編『ドイツ語を考える－ことばについての小論集－』三修社, S.141-148)
- 今道晴彦・恒川元行 (2009) 「DWDS コーパスの概要と利用法」(『Linguistic Science 言語科学』44号九州大学大学院言語文化研究院言語研究会, S.147-166)
- 岩崎英二郎 (1998) 『ドイツ語副詞辞典』白水社
- ヤーコブソン、ローマン (川本茂雄監訳) (1973) 『一般言語学』みすず書房